

周辺言語の漢字音

吉池孝一

- | | |
|-------------------|--------------|
| 1. 序言 | 4. ウイグル漢字音 |
| 2. 中国南方少数民族の漢字系文字 | 5. 契丹語の借用漢語音 |
| 3. チワン語(壮語)の漢字音 | 6. 結語 |

1. 序言

現代モンゴル語の辞典をみると漢語からの借用語として[goandz](食堂)などがあり、これに漢字を当てて「館子」とすることは可能である。しかしながらこれをもって直ちにモンゴル漢字音とするわけにはいかない。このようなものは借用語すなわち語音とするのがふつうである。このあたりの事情は現代ウイグル語や現代チベット語においても同様であろう。そこで、漢字音(字音)と借用語(語音)をどのように区別するかということが問題となる¹。日本漢字音など「何々(語)漢字音」というばあいの漢字音とはなにか。亀井・河野・千野 1996 はこれを「外国字音」、沼本 2007 は「借用字音」と命名しそれぞれに論じている²。その内容を要するに「漢字が外国に移植された結果生じた字音」ということになる。日本漢字音や朝鮮漢字音やベトナム漢字音についてはそのとおりであるが、中国の少数民族のなかにはベトナムのチュー・ノム(字喃)方式の文字表記を持つものがあり「何々(語)漢字音」と称し得る。そこで「外国に移植された」では具合が悪いので「漢字が中国周辺言語(或いは単に他言語)に移植された結果生じた字音」を「何々(語)漢字音」としたい。

¹ 吉田 1994 は 313 頁において字音であることの条件を二つ挙げる。第一は「漢語の音韻変化とは独立して導入時の漢字音を保持すること」。第二は「原則としてすべての漢字に対して、1 つ(ないし複数)の漢字音が用意されていること」。これは過去の資料につき、それが字音であるか語音であるかを判定する基準として挙げたものである。第一の条件は借用語についても言えることであるから第二の条件がより重要であろう。

² 亀井・河野・千野 1996 に「漢字音というまでもなく中国の文字、漢字の読み方であるが、漢字がいわゆる「漢字文化圏」に属したいくつかの外国に移植されると、それぞれの外国特有の字音が生まれた。これを外国字音という。すなわち、日本、朝鮮、越南(ヴェトナム)の漢字音がその外国字音である。・・・(中略)・・・なお、字音は漢字あつての字音である。しかし、字音はいちいちの漢字の読み方であるが、その読み方は漢字によって表わされる語の読み方でもあるので、いちいちの字音はある意味において語でもある。そこで、字音が、それが本来表わすべき漢字から離れて用いられるときは、それは一種の外来語になる。」(241 頁)とあり、沼本 2007 に「漢字は中国語(漢語)を表記する文字として考案され発達して来たものであるから、各漢字は中国語としての発音が常に伴っている。その発音(音韻)を、「漢字」を主体とする側からとらえて「漢字音」と呼ぶ。・・・(中略)・・・中国に近接する諸国、所謂漢字文化圏では、文化・文明上の種々の影響を中国から蒙ってきたが、その重要な側面として漢字・漢文の移植がある。この漢字の移植に際して、漢字を単に表記の道具としてのみ移植したのではなく、移植した時点で各漢字が保有していた中国字音を同時に移植した。それを「借用字音」と呼ぶ。」(364 頁)とある。

「何々(語)漢字音」とするばあい、他言語に移植された漢字とその音をセットで習得し応用することが大前提であり、この点が借用語(語音)と異なる。このような観点から、中国周辺の言語の中に「何々(語)漢字音」と言い得るものとして、日本漢字音・朝鮮漢字音・ベトナム漢字音以外に、どの様なものがあるかということにつき、初歩的ながら調査を試みた。まずは現に漢字および漢字を変形した文字を使用する中国南方の少数民族語の漢字音を紹介し、ついでその他の漢字音を紹介する。

2. 中国南方少数民族の漢字系文字

中国南方の少数民族のなかには漢字をそのまま用いたり漢字を変形して新たな漢字系文字を作り出したりして自らの言語を表記する人たちがいる。例えば、広西壮族自治区を中心に分布するチワン族(壮族)は自らの言語を表記するために漢字を組み合わせて作った文字、すなわち「古壮字」「方塊壮字」「土俗字」などと称される漢字系文字を使用してきた。このような漢字系文字を使用する少数民族は中国南方に集中しており、次に挙げるようにその数は少なくない。雲南省のハニ族(哈尼族)の文字。これは一般に使用された文字ではなく 20 世紀中頃以前とされる資料が僅かながらある³。湖南省・広西壮族自治区・貴州省一帯のカム族(侗族)の文字。初出は明末清初であり今でも使用される⁴。湖南省のミャオ族(苗族)の文字。清末に苗族の知識人が考案した文字で今でも相当に広い範囲で使用される⁵。貴州省のプイ族(布依族)の文字。漢字をそのまま用いるのが主体であるが漢字を変形して作った 80 字ほどの文字も報告されている⁶。雲南省のペー族(白族)の文字。古くは唐代に発し今でも使用される⁷。さらには雲南省・広西壮族自治区一帯のヤオ族(瑶族)の文字がある⁸。このような漢字系文字の中に漢字で表記された借用漢語や漢字音を利用して民族語を表記したものがあるならば「何々(語)漢字音」の候補となる。今回は漢字系文字を使用する中国南方少数民族のうちチワン族の漢字音を検討した。

3. チワン語(壮語)の漢字音

チワン族(壮族)は中国の少数民族のなかで人口が最も多く 2000 年の統計によると 1600 万人強にのぼり広西壮族自治区を中心に分布する。この民族は自らの言語を表記するために漢字および漢字を変形して作った文字すなわち「古壮字」「方塊壮字」「土俗字」などと称される漢字系文字を民間で使用してきた⁹。古くは唐代に遡る資料があり文学作品をは

³ 李永燧・王爾松 1986 の 152 頁参照。

⁴ 梁敏 1980 の 89 頁参照。および、趙麗明 1991 の 215-220 頁参照。

⁵ 西田龍雄 2001 の 782-799 頁参照。

⁶ 呉慶祿 1991 の 230-244 頁参照。

⁷ 徐琳・趙衍蓀 1984 の 128-136 頁及び王鋒 1996 の 225-237 頁参照。

⁸ 周有光 1989 の 37-55 頁参照。

⁹ この文字は各地で字形が異なる場合がある。また行政文書や正規の教育機関で採用されたこととはなく、チワン族の正式な文字とは言えない。

じめ多方面にわたる資料が確認されており現在でも使用されるが¹⁰、これに代わる文字として 1955 年にラテン文字による表記方案が制定された。その後このラテン文字表記方案は修訂を経て 1982 年に公布・使用されている¹¹。なお、1955 年のラテン文字表記方案においてチワン語の武鳴方言音がチワン語標準語音として採用されたわけであるが、本稿で資料として利用する『古壮字字典』(1989 年)の音も武鳴方言によるものである。さて、古壮字は次に挙げる四種の文字から成る。1. 会意字。二つの漢字を意符として左右上下に配して新たな文字を作りチワン語を表記したもの。2. 形声字。二つの漢字を意符と声符として左右上下に配して新たな文字を作りチワン語を表記したもの。3. 借漢字。音を借りた「借音字」と、音と義の両方を借りた「借音借意字」がある。前者は漢字の仮借で後者は借用漢語である。4. その他の変形漢字および象形字。会意字や形声字以外の変形漢字および漢字とは無関係の象形文字を作りチワン語を表記したもの。以上四種のうち漢字音と関係するものは 3 の借漢字である。あるいは 2 の形声字の声符も漢字音として利用することができるかもしれない。ここでは 3 の「借音借意字」、すなわち漢字で表記された借用漢語音をチワン語の漢字音として検討する。

先に述べたように、『古壮字字典』の各文字に付された音声記号はチワン語北部方言の武鳴方言音である。したがってこれから紹介する漢字音は、チワン語(武鳴方言)の漢字音ということになる。その漢字音の特徴として以下の四点をあげることができる。

①中古漢語音の破裂音声母には無声無気音・無声有気音・有声音の区別があるけれどもその区別は声母に反映されず一律に無声無気音となる¹²。例えば、比盃本(幫母*p-)拍(滂母*p^h-)白便陪(並母*b-)は p-となり、滄底打短(端母*t-)踏汰趨(透母*t^h-)特頭大凸垌段(定母*d-)は t-となり、缺各鯁鵠几堅京公角(見母*k)擎(群母*g)は k-となる。

②中古漢語音の歯音声母の破擦音および舌上音の一部は無声齒茎硬口蓋摩擦音の ɸ-となるが、摩擦音は無声齒摩擦音のθ-となる。例えば、總(精母*ts-)奏且(清母*ts^h-)尽从(從母*dz-)差(初母*tʂ^h-)帛針(章母*tc-)拆(徹母*t^h-)などの破擦音は ɸ-となり、相性消小算(心母*s-)生双(生母*s^ʃ-)乘(船母*dz-)などの摩擦音と一部の破擦音はθ-となる。

③中古漢語音の鼻音韻尾*-m, *-n, *-ŋ はそれぞれ-m, -n, -ŋ となる。例えば、針音(侵韻*-m)喊攬(敢韻*-m)などは-m となり、便(仙韻*-n)本(混韻*-n)尽引(軫韻*-n)などは-n となり、盃趨(宕韻*-ŋ)从濃(鍾韻*-ŋ)總(董韻*-ŋ)などは-ŋ となる。

④中古漢語音の閉鎖音韻尾*-p, *-t, *-k はそれぞれ-p, -t, -k となる。例えば、押(狎韻*-p)踏(合韻*-p)鵠(合韻*-p)合(合韻*-p)腊(盍韻*-p)納(合韻*-p)は-p となり、凸(沒韻*-t)は-t となり、白拆(陌韻*-k)特惑(德韻*-k)各樂(鐸韻*-k)孝(覺韻*-k)六(屋韻*-k)は-k となる。

¹⁰ 梁庭望 1991「古壮字及其文献新探」『中国民族古文字研究(第三輯)』天津古籍出版社、150-164 頁参照。

¹¹ 以上は韋慶穩・覃国生 1980、梁敏 1992、及び魏忠 2004 の 233-241 頁参照。

¹² 中古漢語の全濁声母*b-, *d-, *g-などに由来する無声無気音声母は他と声調が異なる。

さて、チワン語はカム=タイ語群のタイ諸語に属す言語¹³で北部方言と南部方言に大別され、北部方言には p^h-, t^h-など無声有気音はないのがふつうである。武鳴県は省都の南寧の北部に位置しておりそこで話される武鳴方言は北部方言に属し無声有気音はない¹⁴。上に挙げた①において中古漢語音にみられる無声有気音が無声無気音となるのはこのためであり、これはチワン語(武鳴方言)の音韻の影響によって生じた訛りである。一方、中古漢語音にみられる有声音が、無声無気音となることについては検討を要する。カム=タイ語群には ʔb, ʔd という声門閉鎖音を伴った二種の有聲破裂音が広く認められ武鳴方言にもある¹⁵。ところが漢字で表記された借用漢語音につき武鳴方言によるならば、白便賠(並母**b*)や特頭大凸峒段(定母**d*)などを有声音の ʔb-, ʔd-ではなく無声音の p-, t-とする。これは漢語原音の音声とチワン語(武鳴方言)の ʔb, ʔd とが相容れないものであったことを示唆する。漢語原音に無声化が起こっており、そのことによって ʔb-, ʔd-ではなく p-, t-を当てたということであるかもしれない。そうであるならば、チワン語(武鳴方言)にみられる漢字音のこの状況は、日本の漢音の場合と類似したものとなる。すなわち漢音が拠った唐代長安音において有声音の無声化が進んでおり、なおかつ日本語で有気音と無気音を区別しないため、幫(**p*)と滂(**p*^h)と並(**b*)を一律にハ行で読み、端(**t*)と透(**t*^h)と定(**d*)を一律にタ行で読む。次いで②であるが、チワン語(武鳴方言)には何らの破擦音もなく、ただ二種の摩擦音 ɸ-, θ-がある。中古漢語にみられる歯音の破擦音声母などを一律に摩擦音とするのはチワン語(武鳴方言)の音韻の影響によって生じた訛りである。北部方言に属す武鳴方言には ts-, tɸ-など破擦音がないため¹⁶、破擦音声母は一律に口蓋化した摩擦音の ɸ-としたのである。このように、精母字**ts*-や清母字**ts*^h-などの破擦音については歯茎硬口蓋摩擦音 ɸ-で受け止めたのであるが、心母字**s*-などの摩擦音は歯摩擦音の θ-で受け止めた。旧破擦音と旧摩擦音の区別の枠組みは、ɸ-と θ-という二種の摩擦音によって保たれているのである。最後に③④の鼻音韻尾と閉鎖音韻尾であるが、音節末子音の -m, -n, -ŋ, -p, -t, -k はカム=タイ語に広くみられチワン語(武鳴方言)にもある。これらと中古漢語音の韻尾の間に対応が見られということは、チワン語(武鳴方言)が拠った漢語原音に中古漢語音の韻尾と同様の韻尾が保存されていたことを示す。なお、チワン語の中には「老借詞」(古い漢語借用語)と「新借詞」(新しい漢語借用語)の層があり「老借詞」には -m, -p, -t, -k が認められるが、「新借詞」には -m, -p, -t, -k はなく近代に西南官話より取り入れたものであるという¹⁷。これによるならば古壮字の漢字音は「老借詞」ということになる。

これまで、漢字を使用する周辺言語の例としてチワン語(武鳴方言)を取り上げ、漢字で表記された借用漢語をとおして漢字音を検討した。字音としての規範化は日本漢字音や朝鮮漢字音のように十分になされていないかもしれないが、「漢字が中国周辺言語に移植

13 チワン語の言語系統については諸説ある。倪大白 1998 参照。

14 韋慶穩・覃国生 1980 の 3 頁及び 79 頁参照。

15 倪大白 1998 の 168 頁、韋慶穩・覃国生 1980 の 3 頁参照。

16 韋慶穩・覃国生 1980 の 3 頁参照。

17 韋慶穩・覃国生 1980 の 12-20 頁参照。

された結果生じた字音」にはちがいない。漢字系文字を使用する他の中国南方少数民族語の資料のなかにもチワン語(武鳴方言)と同様に漢字音と呼べるものが認められるはずであり、周辺言語の漢字音がどのように成立したかを考察するうえで中国南方少数民族語の資料は参考となる。次ぎに漢文(仏典など)を音読する習慣がありそれによって漢字音が定着した例を紹介する。

4. ウイグル漢字音

先に漢字系文字を使用する中国南方の少数民族の例を検討したわけであるが、北方の諸民族もかつて漢字系文字を使用していた時期があった。モンゴル系とされる遼国の契丹人は契丹文字を作り、ツングース系とされる金国の女真人は女真文字を作った。これらの文字には漢字系文字が含まれる。このように漢字系文字を利用する例もあるが、北方の諸民族は概して漢字系文字の使用を発展させることはなく、結果として表音文字のソグド系文字を採用した。この文字は西方よりアジアの北部に持ち込まれ、ウイグル文字(9~14世紀)、モンゴル文字(13世紀~今に至る)、満洲文字(17~20世紀)と改良されながら伝わり、現在の中国新疆ウイグル自治区のシボ族(錫伯族)のシボ文字や中国内蒙古自治区のモンゴル文字となった。これらソグド系文字で表記された言語のうち、ウイグル語には漢字音の存在が確認されておりウイグル漢字音と称される。

ウイグル語文献は9世紀から14世紀の間にトルファンや敦煌などで書き残されたもので、そのなかに漢文仏典を音読した資料がある。この資料を分析することによりウイグル人がウイグル漢字音と呼び得る音読法を定着させていたことがわかるという。すなわち、元朝時代に漢訳された『聖妙吉祥真實名経』などのウイグル文字表記漢文の音は、当該経典が漢語訳された時代よりも3~4世紀古い時代の漢語西北方言をウイグル語訛りで読んだものである。その漢字音の特徴として以下の五点を挙げることができる。

①中古漢語音にみられる閉鎖音韻尾**-p*, **-t*, **-k* が、*-b*, *-r*, *-g*~*-γ*となる。例えば、合(**-p*)舌(**-t*)北(**-k*)楽(**-k*)は合(*-p*)舌(*-r*)力(*-ig*)楽(*-ay*)となる。

②中古漢語音にみられる声母**-m*, **-n*などを一定の条件に従って *b*-, *d*-などとする。例えば、魔蜜黙(**-m*)と満面(**-n*)猛明(**-ŋ*)、泥内悩(**-n*)と念(**-m*)難(**-n*)能(**-ŋ*)は魔蜜黙(*b*-)と満面(*m-n*)猛明(*m-ŋ*)、泥内悩(*d*-)と念(*d-m*)難(*d-n*)能(*n-ŋ*)となる。

③中古漢語音にみられる軟口蓋鼻音韻尾**-ŋ*を一定の条件に従って表記しない(*-ŋ*)。例えば、宕撰の当剛(**-aŋ*)、梗撰の猛生(**-eŋ*)頂形(**-eŋ*)名精(**-eŋ*)、曾撰の等能称(**-əŋ*)、通撰の通童中(**-uŋ*)頌誦(**-oŋ*)は当剛(*-ŋ*)、猛生(*-ŋ*)頂形(*-ŋ*)名精(*-ŋ*)、等能称(*-ŋ*)、通童中(*-ŋ*)頌誦(*-ŋ*)となる。

④中古漢語にみられる歯頭音**-ts*-, **-tsʰ*-, **-dz*-, **-s*-, **-z*-は一斉にウイグル文字{s}で表記され。例えば、最(**-ts*-)草(**-tsʰ*-)在(**-dz*-)笑(**-s*-)像(**-z*-)の声母はウイグル文字{s}で表記されウイグル漢字音ではs-であったとされる¹⁸。

¹⁸ 高田 1985 は「慈悲道場懺法」「法華経音」(いずれも小断片)の難字音注漢字の分析に拠り早

⑤中古漢語にみられる介音の*-i-, *-u-, *-iu-などが表記されずに核母音と縮合する。例えば、業(*ŋɪep) 尊(*tsuən) 願(*ŋɪuən)は業(gep) 尊(sun) 願(gun)となる。

さて、①の閉鎖音韻尾は古い特徴の保存であり、力(-ig) 楽(-aŋ)など先行母音の異なりに従ってウイグル文字{k}と{q}を用いて-g と-ŋを表記し分けるのはウイグル語の訛りである。②の鼻音声母を非鼻音子音で表記するのは、唐五代の西北漢語音の鼻音声母につき所謂非鼻音化(denasalization)が進行していたとされることの反映である。音声[mb-, nd-]などが外国人の耳には音韻 b-, d-などと聞こえ、そのように訳出することが外国人の間で習慣として定着したものであろう。このような西北漢語音の特徴の反映は日本の漢音の場合に類似している。③の軟口蓋鼻音韻尾*-ŋが、先行する母音の異なりにより表記されないのも唐五代西北漢語音の反映である。④と⑤はウイグル語の音韻の影響によって生じた訛りである。

このようなウイグル文字表記漢文の音は漢文(仏典など)の音読をとおしてウイグルに定着した漢字音であるが、これとはやや異なる音を示すウイグル語文献もある。10世紀末に書かれたとされるウイグル語文献『大慈恩寺三蔵法師伝』中の音写漢語の音は、後代の『聖妙吉祥真実名経』(13世紀後半から14世紀中葉頃)などのウイグル文字表記漢文と基本的に一致するが、より実際の漢語音に近い表記を使用する。例えばウイグル文字表記漢文は中古漢語の*ts-, *tsʰ-, *dz-, *s-, *z-を一斉に s-とするが、『大慈恩寺三蔵法師伝』では*ts-, *tsʰ-, *dz-をウイグル文字{ts}で表記し、*s-, *z-をウイグル文字{s}で表記する¹⁹。以上は主に庄垣内 1995, 2003 を参照して述べた。

さて、これらの資料を年代順にならべると、ウイグル漢字音の成立→『大慈恩寺三蔵法師伝』(実際の漢語音に近い表記を使用)→『聖妙吉祥真実名経』(ウイグル語化した漢字音)となる。このような状況を俯瞰して吉田 1994 は「導入される漢語の発音に近づけるために、多少ウイグル語の音韻体系から逸脱した形で受け入れられた字音は、その後再びウイグル語の音韻体系に合致するように「土着化」されることがあった。」ととらえる。これを破擦音に沿っていうならば、当初のウイグル漢字音 ts-, s-は「土着化」すなわちウイグル語化を経て s-となったということである²⁰。これは一つの見方である。次ぎに紹介する契丹語においては同じ破擦音について逆の現象が起こっている。すなわち「漢語化」するのである。

次ぎに「何々(語)漢字音」と称されることもあるが、直ちには漢字音とするわけにはい

くウイグル漢字音の存在を明かした。歯頭音については、ウイグル語文献に摩擦音の心母*s-, 邪母*z-がすべて S で写されるのに対し、破擦音系列(精*ts-, 清*tsʰ-, 從母*dz-)はウイグル文字では TS で写されるものと S で写されるものとの二通りあることより、難字音注漢字の「醉(*ts-) 音取(*tsʰ-)」「鑿(*ts-) 音作(*dz-)」、「誓(*ts-) 音四(*s-)」「飡(*tsʰ-) 音散(*s-)」「[殘](*dz-) 音散(*s-)」などの状況につき、字音においても原則的には音韻 ts と音韻 s の区別はあったと解釈する(以上 12 頁による)。音韻 ts と音韻 s の区別があったとするのは一つの見方であり、この難字音注漢字につき『聖妙吉祥真実名経』などのウイグル文字表記漢文と同様に s-であったと解釈することも不可能ではない。

¹⁹ ウイグル文字{ts}は{t}(tau)の直下に{s}(samech)を書く。

²⁰ 「土着化」をウイグルについていうならば「ウイグル語化」ということである。「ウイグル語化」という表現は橋本 2004 によった。

かない例として契丹語について検討する。

5. 契丹語の借用漢語音

遼(916~1125年)の契丹語に漢字音と呼べるものがあったかどうか問題となる。遼では契丹文字が作られた。この文字には契丹大字(ふつう表意文字主体とされるが音節文字の要素も少なくないともされる)と契丹小字(表音文字主体)の二種類がある。両者ともに解読半ばの文字であり、これらの文字で書かれた文がどのような性格のものであるか確実なところはわからないのであるが²¹、「契丹漢字音」と表現した文献もあるのでここでその漢語音につき確認をしておきたい²²。

さて契丹大字文は契丹大字を用いて書かれている。この文字の種類は1,800余りあり、その内漢字をそのまま利用したものは約1/5で、「皇帝、太皇、太王、一、二、三、五、十、廿、月、日、東、南、西、北、住、仁、位、弟、工、已、百、未、高、乃、此、至、午、田、亡、寸、殿」などがある²³。これらが漢語音で音読されたのか或いは契丹語で訓読されたのかということについては今のところ確かなことはわからないようである。仮に音読されたものを含むとなると、実際に漢字を使用しているわけであるから、先のチワン族の古壮字と同様に漢字音すなわち契丹漢字音とせざるをえない。ところで、契丹大字文中の「皇帝」が暗示する『皇帝』という漢語について契丹小字文では借用漢語音として表記される。このような点からみるならば、漢字をそのまま利用した契丹大字の幾つかについては音読された可能性が皆無ではない。しかしながら、漢字音の存否についての判断は今後の解読の進展を待つしかないであろう。

他方、契丹小字文には大量の漢語語彙がみられる。表音文字である契丹小字が示す音形によって漢語語彙であることが明瞭にわかり、そのほとんどが役職名や地名や人名である。そこで、契丹小字文中のこれらの漢語をどのような性格のものとしてみるかという問題が生ずるわけであるが、その判断にあたって以下の三つの特徴を考慮しなければならない。

①契丹小字文中の漢語の音は、中古漢語音にみられる閉鎖音韻尾*-p, *-t, *-kの区別の消失や全濁声母(*g-, *d-, *z-)の清音化など中世漢語の特徴を示すが、『中原音韻』よりも古い特徴を持った部分もある²⁴。②中古漢語音にみられる歯頭音の*ts-, *ts^h-, *dz-, *s-は遼代に

²¹ 契丹大字文や契丹小字文を、ただちに契丹語を文章語化したものと解してよいものかどうか、現段階では慎重であらねばならないと考えている。

²² 長田夏樹氏に「契丹漢字音探源—契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について—」(2001年。もと1991年5月の日中合同契丹文字国際シンポジウムの発表原稿)がある。題に契丹漢字音とあるが、日本漢字音などと言うばあいの漢字音ではなく、契丹小字で表記された漢語音を契丹漢字音と表現したとも読めるが真意は不明である。

²³ 于宝林1996参照。

²⁴ 長田2001参照。閉鎖音韻尾については、国と圭、副と父、漆と祭、略と小(前者が閉鎖音韻尾)がそれぞれ同音もしくは同韻の表記となるという。声母の清濁については、郡と軍、同と統、署と書(前者が全濁、後者が全清と次清)がそれぞれ同音表記となるという。長田氏は『中原音韻』よりも古い特徴も幾つか紹介する。一つは疑母の存在。吾・儀・御・銀・元の諸字は疑母相当の契丹小字(原字)で表記される。『四声通解』や『蒙古韻略』とは疑母の存否の状況がやや異

は $ts-$, ts^h- , $s-$ ($*dz-$ は無声化して $ts-$ もしくは ts^h- と合流)となっていた。ところで、契丹語には摩擦音の $s-$ は有ったけれども破擦音の $ts-$ や ts^h- なかったようであり²⁵、同様の特徴はモンゴル語やツングース語に広く見られるからまず間違いはないであろう。そこで問題となるのは、漢語音の $ts-$ や ts^h- を契丹小字でどのように表記したかということであるが、 $ts-$, ts^h- , $s-$ を契丹小字で表記するにあたり、三つの段階を追って表記が精密化していったことがわかっている。すなわち、第一段階は、小字{244} (清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985 中の文字番号で契丹小字の原字を示した。これ以後{s}と簡略に表記する)で $ts-$, ts^h- , $s-$ を表記し、小字{258} (これ以後{ts}とする)で $ts-$ を表記した。未だ ts^h- を表記する小字{31} (これ以後{ts^h}とする)は見られない。第二段階は、小字{s}で ts^h- , $s-$ を表記し、小字{ts}で $ts-$ を表記した。未だ ts^h- を表記する小字{ts^h}は見られない。第三段階は、小字{s}で $s-$ を表記し、小字{ts}で $ts-$ を表記した。そして新たに小字{ts^h}を作り ts^h- を表記するようになった。以上を要するに、初期の碑文資料では小字{s}で漢語の $ts-$, ts^h- , $s-$ 表記したが、時代が下るにしたがって表記は精密になり、小字{ts}で漢語の $ts-$ を、小字{ts^h}で漢語の ts^h- を表記する傾向が顕著となる²⁶。文字作製の観点からみると、最

なるという。いま一つは等位の反映。公-ung(東韻一等)、宮-iw-ung(東韻三等)、中-ung(東韻三等)とある。『中原音韻』では公と宮と中とは同韻であるが、契丹文字表記の漢語音では公と中が同韻となり宮とは異なる。以上のうち、閉鎖音韻尾、声母の清濁、等位の問題については沈鍾偉 2006 に同様の指摘がある。なお長田氏によると、公(東韻一等)と中(東韻三等)が同韻となるのは、中の声母が知母から莊母に変化した際に介音 i を吸収したためであり『四声通解』(俗音)にも同様の状況がみられるという。

このような漢語の基盤につき、聶鴻音 1988 は「契丹族與漢族最頻繁的接觸點雖然是在古幽燕地區，但無論是契丹人所說的漢語還是幽燕地區漢人的口語，都是以汴洛地區的語音為基盤的。」(49 頁)とする。中村 2001 は北方諸民族の共通語として使用された漢語口語(漢兒言語)であるとす。すなわち、12 世紀後半の記述である『夷堅志』の文章「契丹小兒初讀書，先以俗語顛倒其文句而習之，至有一字用兩三字者。頃奉使金國時，接伴副使・秘書少監王補，每為予言以為笑。如「鳥宿池中樹，僧敲月下門」兩句，其讀時則曰「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」。大率如此。補錦州人，亦一契丹也。」につき、ここで言う「俗語」とは当時の北方諸民族の共通語として使用された漢語口語(漢兒言語)のことであり、例示された「月明裏和尚門子打，水底裏樹上老鴉坐」のような漢語がそれに当たるとし、そのような言語が遼代に行われていたとする。

²⁵ 聶鴻音 1988 の 43 頁は、遼史「国語解」で漢字表記された契丹の固有語には摩擦音 $s-$ を持つ漢字のみが用いられるとする。

²⁶ 吉池 2003 参照。なおこの小論は日本中国語学会全国大会(2000 年)で資料を配布し口頭発表した内容の一部をまとめたものである。第一段階の資料は、①1053 年「耶律宗教墓誌」、③1057 年「蕭令公墓誌」、⑤1092 年「耶律迪烈墓誌」、⑥1101 年「道宗皇帝哀冊」、⑧1105 年「許王墓誌」。用例の一端を⑤1092 年「耶律迪烈墓誌」で示すと以下の通り。小字{s}で聖宗の「宗」(精母 $ts-$)、採訪の「採」(清母 ts^h-)、相公の「相」(心母 $s-$)を記す。小字{ts}で節度使の「節」(精母 $ts-$)を記す。

第二段階の資料は、⑦1101 年「宣懿皇后哀冊」、⑨1107 年「澤州刺史墓誌」、⑩1115 年「故耶律氏銘石」。重複していた文字の働きに分化が見られる。用例の一端を⑦1101 年「宣懿皇后哀冊」で示すと以下の通り。小字{s}で銀青崇祿大夫の「青」(清母 ts^h-)、宣懿の「宣」(心母 $s-$)を記す。小字{ts}で国子祭酒の「子」「祭」「酒」(精母 $ts-$)を記す。

第三段階の資料は、⑪1150 年「蕭仲恭墓誌」、⑬1170 年「博州防禦使墓誌」。用例の一端を⑬1170 年「博州防禦使墓誌」で示すと以下の通り。小字{s}で宋国の「宋」(心母 $s-$)を記す。小字{ts}で將軍の「將」(精母 $ts-$)を記す。小字{ts^h}で漆水郡の「漆」(清母 ts^h-)を記す。もつ

初は契丹語表記のために小字{s}を作り、これで漢語の ts-や ts^h-や s-表記していたが、漢語音を正確に表記するために次いで{ts}を作り、最後に小字{ts^h}を作ったということである²⁷。③契丹小字文の中に閉鎖音韻尾を伴った中古漢語的な漢語音があるという。報告された例は僅かであるが、「臘月」の「臘」に韻尾-p が認められ、「開国伯」(役職名)・「哀冊」・「度使」(役職名)・「錢帛」「博州」(地名)の「伯」「冊」「度」「帛」「博」に韻尾-k が認められる²⁸。

以上を要するに、契丹小字文中の漢語音は主に中世漢語音に拠っているのであるが、そこに中古漢語音的要素が混じっている。借用漢語の層は少なくとも二種類あるということになる。興味深いことは、漢語音の ts-, ts^h-, s-を契丹小字で表記する仕方である。第一段階では小字{s}で ts-, ts^h-, s-を表記し小字{ts}で ts-を表記するのであるが、第二段階では小字{s}で ts^h-, s-を表記し小字{s}に二点を付した小字{ts}で ts-を表記する。これは音韻として ts-, ts^h-音を持たない契丹人が、当初は借用漢語の ts-, ts^h-を s-で発音していたけれども、漢語の ts-が s-, ts^h-と異なることに気づきその表記にあたって ts-用の文字を新たに作成したことを示す。このように、ts^h-の有気性と s-の摩擦性に共通点を見い出して無気音の ts-と区別することは、音韻として破擦音 ts-, ts^h-を持たない契丹人話者にとって自然なことであろう。このように有気音と摩擦音とを同類とすることは契丹語に限られたことではない。チベット文字で表記された唐五代の漢語西北方言にも同様の現象がみられる。すなわち軽唇音化(f-など)していたことが予想される「飛、非」などの声母の表記に当たって、チベット文字に{f}がなかったため両唇無声有気音の文字{p^h}を利用する²⁹。もっとも契丹小字文の場合、最終的には実際の漢語音により ts^h-, s-から ts^h-を分出し、新たな専用文字を与え、契丹小字文の中の漢語表記の体裁を整えたのである。契丹小字文を作る際に、契丹語訛りの漢語音を実際の漢語音によって矯正したというべきかもしれない。これは借用語音の「漢語化」とも言えよう。契丹小字文中の借用漢語音はこのようなものであるが、その背景に漢字の存在を認めて契丹漢字音と称し得るかどうかということについて

とも、⑩1150年「蕭仲恭墓誌」では、小字{s}が ts-, ts^h-, s-、小字{ts}は ts-、小字{ts^h}は ts^h-というようにその文字使用は重複している。第三段階への過渡的な状況を示すものであろう。

なお、第一段階の前段階には、小字{s}で ts-, ts^h-, s-を表記し、小字{ts}および小字{ts^h}は見られないという段階があったものと想定するが、それを確認し得る確かな碑文資料は出土していないようである。

²⁷ 小字{ts}は、小字{s}に二点を加えた字であり、小字{s}から作られたと想定することができる。この点については孫伯君 2007 も{s}に二点を付し漢語専用字として{ts}を作ったとする。{ts^h}については、沈彙 1980 が漢語専用字として新たに作られたものと指摘する。

²⁸ 吳英喆 2007 参照。吳英喆 2007 は「耶律迪烈」(人名)の「迪」と「烈」に-t が認められるとするが、これは契丹語を漢字音写したもので借用漢語音とは質を異にするので、しばらくは措く。なお、「臘月」の「臘」は漢語音であり「月」は契丹語である。「哀冊」の「哀」は契丹語であり「冊」は漢語音である。これらは契丹語と漢語の複合語として早期から定着していたと考えられる。「開国伯」のばあい、「開国」は中世漢語音、「伯」は中古漢語的な音という奇妙な組合せとなる。

²⁹ 羅常培 1933 の 18 頁参照。「非敷兩母在這四種藏音裏除去四個例外一律變成 p' 音；奉母在千字文跟大乘中宗見解裏也逐漸有變成 p' 音的趨勢，因此我覺得輕唇音在那時候已然開始分化了。」

ては、今のところ抛るべき材料が少なく何ともいえない。契丹大字のばあいと同様に契丹小字についても今後の解読の進展を待つしかない。

6. 結語

チワン語(武鳴方言)の漢字音とウイグル漢字音を紹介した。遼の契丹語については借用漢語の層が少なくとも二種類あることを確認したが、「何々(語)漢字音」と呼べるものであるかどうかという点については今後の解読の進展を待つしかない。ところで、この三種の言語は共に中古漢語音にみられる*ts-, *ts^h-, *s-を摩擦音で受け止めるのであるが³⁰、その受け止め方はそれぞれに異なっており興味深い。この点につき前述の繰り返しとなるが簡単に各言語の状況を確認し次いで思うところを述べる。

先ずチワン語(武鳴方言)であるが、この言語には何らの破擦音もなく、ただ二種の摩擦音 ζ -, θ -がある。その音韻の影響によりチワン語(武鳴方言)の漢字音は、中古漢語音にみられる精母字*ts-・清母字*ts^h-・心母字*s-のうち、精母字*ts-と清母字*ts^h-を歯茎硬口蓋摩擦音 ζ -で受け止め、心母字*s-を歯摩擦音 θ -で受け止めた。旧破擦音と旧摩擦音の区別の枠組みは二種の異なる摩擦音によって保たれる。このような*ts-系声母の受け止め方は独特であり漢字音の訛りの類型として参考となる。次にウイグル語であるが、この言語の固有語には ts-, ts^h-はなく s-のみがあったという。しかしながらウイグル語文献『大慈恩寺三蔵法師伝』(10世紀末)は実際の漢語音に近い表記を持ち中古漢語音にみられる*ts-と*ts^h-を ts-とし、*s-を s-とする。後代の資料となるウイグル文字表記漢文『聖妙吉祥真實名経』(13世紀後半から14世紀中葉頃)などは、中古漢語音にみられる*ts-, *ts^h-, *s-を一斉に s-とする。最後に契丹語であるが、この言語の固有語には ts-と ts^h-はなく s-のみがあったという。この点はウイグル語と同様である。その音韻の影響により、契丹小字文中の借用漢語にあつては中古漢語音にみられる*ts-, *ts^h-, *s-を三段階に表記した。第一段階は、小字{s}で ts-, ts^h-, s-を表記し、小字{ts}で ts-を表記した。ts-に関しては二重の表記がみられる。第二段階は、小字{s}で ts^h-と s-を表記し、小字{ts}で ts-を表記した。第三段階は、小字{s}で s-を表記し、小字{ts}で ts-を表記した。そして新たに小字{ts^h}を作り ts^h-を表記するようになった。時代が下るに従って表記が精密になっていくことを見取ることができる。

以上を要するに、契丹語小字文中の借用漢語を表記した人たちは、ts^h-の有気性と s-の摩擦性を同類と受け止め、無気音の ts-から区別する³¹。これは音韻として ts-と ts^h-がなく s-のみを持つ契丹語話者の選択として理解できるところであり、逆にこのような音の枠組みの選択から契丹語の音韻に ts-と ts^h-が無かったことがわかる。したがって、少なくとも第一と第二段階においては、小字{ts}という文字はあったけれども音韻は s-のみであつ

³⁰ 摩擦音となるのは*ts-, *ts^h-, *s-に限られるわけではないが、問題を複雑にしないためにこの三種に限って議論を進める。

³¹ 先に摩擦音と有気音を同類と受け止める例としてチベット文字{p^h}で軽唇音 f を表記することに触れた。注 29 参照。

たといえよう。第三段階で三種の文字が出揃うけれども、表記が次第に精密になっていくという状況からみるならば、これは契丹小字文中の契丹語訛りの漢語音を実際の漢語音によって矯正し契丹小字文の体裁を整えたと理解すべきであろう。表記する文字の有無とそれによって表記される音韻の有無とが必ずしも一致しないということを示す例である。これを借用漢語音(或いは漢字音)の「漢語化」と表現することも可能である。さて、ウイグル文字表記漢文『聖妙吉祥真実名経』(13世紀後半から14世紀中葉頃)などは、*ts-, *ts^h-, *s-につき、ウイグル文字{ts} {s}の二種があるにもかかわらず一斉にウイグル文字{s}で表記する。これは契丹語と同様に、『聖妙吉祥真実名経』などの背景にあるウイグル語の音韻にも ts-, ts^h-は無く s-のみが有ったことの反映である。他方、時代は先立つウイグル語文献『大慈恩寺三蔵法師伝』(10世紀末)は、*ts-, *ts^h-をウイグル文字{ts}で、*s-をウイグル文字{s}で表記する。漢語表記用としてウイグル文字{ts}を使用するところは先の契丹小字文と同様であるが、契丹小字{s}と{ts}の間に見られたような音韻の存否を予想し得る特殊な関係はウイグル文字{s}と{ts}の間には認められないようであり、したがって文字表記の状況のみから ts という音韻の存否を確言することはできない。

ところで、先にウイグル資料を年代順にならべた。ウイグル漢字音の成立→『大慈恩寺三蔵法師伝』(実際の漢語音に近い表記を使用)→『聖妙吉祥真実名経』(ウイグル語化した漢字音)。このような状況につき、ウイグル漢字音の成立(s-, ts-)→『大慈恩寺三蔵法師伝』(s-, ts-)→『聖妙吉祥真実名経』(s-)ととらえて、字音の「土着化」すなわちウイグル語化と見ることは可能である。しかしながらウイグル漢字音の成立(s-)→『大慈恩寺三蔵法師伝』(s-, ts-)～『聖妙吉祥真実名経』(s-)ととらえて、当初のウイグル漢字音には音韻 s-のみあったが、『大慈恩寺三蔵法師伝』のウイグル語訳に携わった人物は³²実際の漢語音によってウイグル文字表記の体裁を整えたとする可能性も排除できない。そうであるならば先に見た契丹語の「漢語化」と類似した状況となる。あるいは漢語との接触により音韻 ts-を獲得した結果、漢語の ts-と ts^h-を同類と見なし s-と区別したという可能性も同様に排除できない。可能性をあげつらえば切りがないのであるが、日本のように生きた漢語から離れて漢字音(もしくは漢語音)を熟成する環境もあれば、契丹のように常に漢語と接触する環境もある。後者の場合「漢語化」(音韻を獲得したか否かは問わない)は何時でも起こり得たであろうし、そのことによって資料毎に様々な状況を呈するであろう。ウイグルの場合はどのような傾向にあったのであろうか。

いずれにしても、周辺言語が漢語音をどのように受け入れ変形し定着させ漢字音(もしくは借用漢語音)としたかという点につき、異なる言語の状況を互いに比較し考察することによって新たな視点を得るといふようなこともあるかもしれない。

³² 訳者はシンコ・サリ(Šiŋqo Säli)という僧都。庄垣内1986の18-19頁によると「ウイグル語への訳者 Šiŋqo Säli は他に『金光明最勝王経』『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』など漢訳からのウイグル語訳も行っており、漢文には習熟していたとふつう考えられているが、『慈恩伝』に関するかぎり、かなり多くの誤訳がみられる。誤訳中には漢語音を写した部分も含まれている。」という。

〈参考文献(発行年順)〉

【漢字音】

- 吉田 豊 1994. 「ソグド文字で表記された漢字音」, 『東方学報』第 66 冊, 380-271(1-110)頁。
亀井 孝・河野六郎・千野栄一 1996. 「漢字音」, 『言語学大辞典 第 6 卷 術語編』三省堂, 238-244 頁。
沼本克明 2007. 「字音」, 『日本語学研究事典』明治書院, 364-365 頁。

【中国少数民族語】

- 梁 敏 1980 『侗語簡誌』民族出版社。
韋慶穩・覃国生編著 1980. 『壮語簡誌』民族出版社。
徐 琳・趙衍蓀 1984. 『白語簡誌』民族出版社。
李永燧・王爾松 1986. 『哈尼語簡誌』民族出版社。
周有光 1989. 「漢字文化圏の文字演変」 『民族語文』1989 年第 1 期、37-55 頁。
廣西壮族自治区少数民族古籍整理出版規劃領導小組主編 1989. 『古壮字字典』廣西民族出版社。
趙麗明 1991. 「漢字侗文與方塊侗字」 『中国民族古文字研究』天津古籍出版社。
吳慶祿 1991. 「布依族古籍中的方塊布依字」 『中国民族古文字研究(第三輯)』天津古籍出版社。
梁 敏 1992. 「壮文」, 『中国少数民族文字』中国藏学出版社, 140-145 頁。
王鋒 1996. 「方塊白文の歴史發展和現状」 『中国民族古文字研究(第四輯)』天津古籍出版社。
戴慶厦 1998. 「第一節 漢藏語系語言研究」, 『二十世紀的中国少数民族語言研究』(戴慶厦主編) 書海出版社, 2-98 頁。
倪大白 1998. 「第三節 侗台語族(壮侗語族)語言研究」, 『二十世紀的中国少数民族語言研究』(戴慶厦主編) 書海出版社, 166-234 頁。
西田龍雄 2001. 「東アジアの諸文字」 『言語学大辞典 別卷 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001 年、782-799 頁。
魏 忠 2004. 『中国的多種民族文字及文献』北京市：民族出版社。

【ウイグル語】

- 高田時雄 1985. 「ウイグル字音考」, 『東方学』第七十輯, 150-134(一-十七)頁。
庄垣内正弘 1987. 「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」, 『内陸アジア言語の研究』II, 17-156 頁。
高田時雄 1990. 「ウイグル字音史大概」, 『東方学報』第六十二冊, 329-343 頁。
吉田 豊 1994. 「ソグド文字で表記された漢字音」, 『東方学報』第 66 冊, 380-271(1-110)頁。
庄垣内正弘 1995. 「ウイグル文字音写された漢語仏典断片について —ウイグル漢字音の研究—」, 『言語学研究』(京都大学言語学研究室)第 14 号, 65-152 頁。
庄垣内正弘 2003. 「文献研究と言語学 —ウイグル語における漢字音の再構と漢文訓読の可能性—」, 『言語研究』第 124 号, 1-34 頁。

橋本貴子 2004. 「トゥルフアン出土の難字音注断片に反映されるウイグル漢字音について ―ベ
ルリン所蔵の二断片 Ch/U6781 と Ch2369 の分析―」, 『神戸市外国語大学外国語研究 58 アジ
ア言語論叢』 5, 17-44 頁。

【契丹語】

羅常培 1933. 『唐五代西北方音』(単刊甲種之十二) 国立中央研究院歴史語言研究所。

沈 彙 1980. 「論契丹小字的創製與解讀 ―兼論達斡爾族的族源」, 『中央民族学院学報』
1980-4, 50-57 頁。

于宝林 1996. 「契丹文字制定時借用漢字的初步研究」, 『内蒙古大学学报』 1996 年第 3 期, 59-64
頁。

聶鴻音 1988. 「論契丹語中漢語借詞的音系基礎」, 『民族語文』 1988 年第 2 期, 41-49 頁。

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』 中国社会科学出版社。

中村雅之 2001. 「契丹人の漢語 ―漢児言語からの視点―」, 『富山大学人文学部紀要』 第 34
号, 107-116 頁。

長田夏樹 2001. 「契丹漢字音探源 ―契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系につ
いて―」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学―中国諸民族の言語・契丹女真碑文
積・民俗言語学試論・邪馬台国の言語―』 ナカニシヤ出版, 724-737 頁。

吉池孝一 2003. 「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館)
第 13 号, 18-21 頁。この小論は日本中国語学会全国大会(2000 年)で資料を配布し口頭発表した
内容の一部をまとめたものである。

沈鍾偉 2006. 「遼代北方漢語方言的語音特徴」, 『中国語文』 2006 年第 6 期, 483-498 頁。

吳英喆 2007. 「契丹小字中の漢語入声韻尾的痕跡」, 『漢字文化』 2007 年第 3 期, 26-29, 64 頁。

孫伯君 2007. 「契丹小字幾類声母的讀音」, 『民族語文』 2007 年第 3 期, 44-51 頁。